



## 鉄筋コンクリ - ト構造配筋標準図 [ 1 ]

## 1. 共通事項

## A. 適用範囲

- この標準図は、各種構造（ＲＣ造、ＳＲＣ造、Ｓ造）の鉄筋コンクリート造部分に適用する。
- 設計図書、特記仕様書に記載してある事項以外は、この標準図による。この標準図に、記載されていない事項は、「建築工事標準仕様書」（以下、標仕）による。
- 使用する鉄筋、及び溶接金網は、特記による。この標準図は、表１．１に示す鉄筋および溶接金網に適用する。これ以外は特記による。

表１．１

規格番号	規格名称	種類の記号
JIS G3112	鉄筋コンクリート用棒鋼	SR235, SR295 SD295A, SD295B SD345, SD390
JIS G3117	鉄筋コンクリート用再生棒鋼	SDR295, SDR345
JIS G3551	溶接金網	

## B. 凡例

- d 鉄筋の直径（異形鉄筋では呼び名に用いた数値、丸鋼では径）  
ho 部材の内法高さ  
lo 部材の内法寸法  
r 半径  
@ 間隔  
ℓ 中心線

## C. 鉄筋の表示

- 鉄筋の表示記号は、表１．２による。

表１．２

表示記号		●	×	∅	●	○	⊙	⊗	⊕
鉄筋径	異形鉄筋	D10	D13	D16	D19	D22	D25	D29	D32
	丸鋼	9	13	16	19	22	25	29	32

- (1) 上記の表示記号を使用しない場合は特記による。  
(2) 上記の表示記号は、この配筋標準図には適用しない。

## 2. 鉄筋の加工・組立て

## A. 加工・組立て

- 鉄筋は、設計図書に指定された寸法及び形状に合わせ、常温で正しく加工する。
- 有害な曲がり、ひび割れ、ささくれ等の損傷のある鉄筋は、使用しない。
- 鉄筋の切断は、シャッカッターや電動カッター、または鉄筋冷間直角切断機等によって行う。ただし、圧接端面となる場合は、ガス切断を行うてはならない。
- 鉄筋には、点付け溶接、アークストライクを行わない。
- 鉄筋の溶接は、アーク溶接とする。溶接技能者は、工事に相応した技量を有する者とする。
- 鉄筋の組立は、鉄筋の交差部および継手部の要所を径 0.8mm 以上の鉄線で結束し、適切な位置にスペーサー、うま、吊り金物等を使用して行う。  
なお、スペーサーは、転倒及び作業荷重等に耐えられるものとし、スラブのスペーサーは、原則として鋼製とする。また、コンクリート打放しの仕上げとなる箇所には、防錆処理を行ったスペーサーを使用する。
- 前に打設したコンクリートから出ている鉄筋の位置を修正する場合は、鉄筋の付け根で急に曲げないで、できるだけ長い距離で修正する。
- 設備配管、スイッチ等の設置により、設計図書に定める配筋が困難な場合は、設計者及び監督職員と協議する。

## B. 末端部のフック

- 次の場合、鉄筋の末端部にはフックを付ける。
  - 丸鋼
  - 異形鉄筋
    - 柱の四隅にある主筋で、重ね継手の場合及び最上階の柱頭にある場合（図２．１の●印で示す鉄筋）。
    - 梁主筋の重ね継手で、梁の出隅及び下端の両側にある場合（図２．１の●印で示す鉄筋）。ただし、基礎を除く。
    - 煙突の鉄筋（壁の一部となる場合を含む）。
    - 杭基礎のベース筋。
    - 帯筋、あばら筋及び幅止め筋。

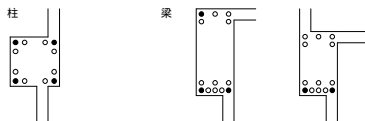


図２．１

## C. 折曲げ

- 鉄筋の折り曲げは、表２．１及び表２．２による。

表２．１ 鉄筋の折曲げ（末端部）











折曲げ 角 度	折曲げ図	折曲げ内法直径（D）			使用箇所
		SD295A、SD295B SD345			
		D16 以下	D19 ～D38	D10 ～D38	
180°		3d以上	4d以上	5d以上	柱、梁の主筋 杭基礎のベース筋 D16以上の鉄筋
135°		3d以上	4d以上	5d以上	 あばら筋、帯筋、 スパイラル筋 D13以下の鉄筋
90°		3d以上	4d以上	5d以上	 T形及びL形の 梁のあばら筋
135° 及び 90°		3d以上	4d以上	5d以上	 90° 135° 幅止め筋

表２．２ 鉄筋の折曲げ（中間部）

折曲げ 角 度	折曲げ図	折曲げ内法直径 ( D )			使用箇所
		SD295A、SD295B SD345、SD390			
		D16 以下	D19 ~D25	D29 ~D38	
90° 以下		3 d 以上	4 d 以上	—	 あばら筋、帯筋、 スパイラル筋
		4 d 以上 (5 d 以上)	6 d 以上	8 d 以上	その他の鉄筋

(注) ( ) 内はSD390の場合を示す。

## 3. 鉄筋の継手・定着

## A. 鉄筋の継手及び定着長さ

- 鉄筋の継手は重ね継手、ガス圧接継手又は特殊な鉄筋継手（建築基準法施行令第73条5項の規定に適合するもの。）とし、適用は特記による。特記がなければ、鉄筋の種類に応じた継手工法は、表３．１による。

表３．１ 鉄筋の種類に応じた継手工法

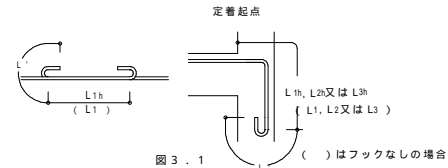
種類の記号	適用径の範囲	
	重ね継手	ガス圧接継手
SD295A	D16以下	—
SD295B SD345 SD390	原則として、D16以下とする。 ただし、基礎、耐圧版、土圧を受ける壁等の大断面部材の場合は、D25以下とする。また、場所打ちコンクリート杭の場合は、D32以下とする。	D19以上

- 重ね継手および定着の長さは、特記がなければ表３．２による。

表３．２ 鉄筋の重ね継手及び定着の長さ

鉄筋の 種 類	JISの 設計基準 数値 Fc(N/mm2)	フックなし		L3		フックあり			
		L1	L2	小梁	スラブ	L1h	L2h	小梁	スラブ
SD295A SD295B	18	45d	40d	20d	10d かつ 150mm 以上	35d (40d)	30d (40d)	10d	—
	21	40d	35d (40d)			30d (40d)	25d (40d)		
SD345	24,27 30,33,36	35d (40d)	30d (40d)			25d (40d)	20d (40d)		
	18	50d	40d			35d (40d)	30d (40d)		
	21	45d	35d (40d)			30d (40d)	25d (40d)		
	24,27 30,33,36	40d (40d)	35d (40d)			25d (40d)	20d (40d)		
SD390	21	50d	40d			35d (40d)	30d (40d)		
	24,27 30,33,36	45d (40d)	40d (40d)			30d (40d)	25d (40d)		

- (注) 1. ( ) は、柱に取り付ける梁の引張り鉄筋の定着長さを示す。  
ただし、軽量コンクリートを除く。  
2. L1, L1h: 3. 以外の直線定着の長さ及びフックあり定着の長さ。  
3. L2, L2h: 割製破壊のおそれのない箇所への定着長さ。  
4. L3: 小梁及びスラブの下端筋の直線定着長さ（基礎耐圧スラブ及びこれを受ける小梁は除く）。なお、片持小梁及び片持スラブの場合は、20d及び10dを25d以上とする。  
5. L3h: 小梁下端筋のフックあり定着長さ。  
6. フックあり定着の場合は、図３．１に示すようにフック部分 L' を含まない。また、中間部での折曲げは行わない。  
7. 軽量コンクリートの場合は、表の ( ) 内の値に 10d、その他の値に 5d を加えたものとする。



- 定着方法は、標仕5.3.4(e)(2)による。

## B. 隣合う継手の位置

- 隣合う継手の位置は、表３．３による。ただし、スラブ及び壁の場合でD16以下は除く。なお、先組み工法等で、柱、梁の主筋の継手を同一箇所に設ける場合は、特記による。

表３．３ 隣合う継手の位置（壁・床版を除く）

フックのある場合	
フックのない場合	
圧接継手及び機械式継手	

## C. 溶接金網の継手及び定着

- 溶接金網の継手及び定着は、図３．２による。

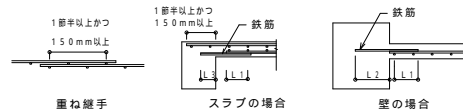


図３．２

## 4. 鉄筋のかぶり厚さ及びあき

## A. 鉄筋のかぶり厚さ

- 設計かぶり厚さは、特記による。特記が無ければ、表４．１による。但し柱及び梁の主筋にD29以上を使用する場合は、主筋のかぶり厚さを径の1.5倍以上として最小かぶり厚さを定める。

表４．１ 鉄筋のかぶり厚さ（単位：mm）

構造部分の種類			設計かぶり	最少かぶり	
			厚さ	厚さ	
土に接しない部分	スラブ、耐力壁 以外の壁	仕上げあり	30	20	
		仕上げなし	40	30	
	柱、梁、 耐力壁	屋内 仕上げあり	40	30	
		仕上げなし	40	30	
		屋外	仕上げあり	40	30
			仕上げなし	50	40
	擁壁、耐圧スラブ		50	40	
	土に接する部分	柱、梁、スラブ、壁	* 50	* 40	
基礎、擁壁、耐圧スラブ		* 70	* 60		
煙突等の高熱を受ける部分			70	60	

- (注) 1. 設計かぶり厚さ：鉄筋加工に用いる標準かぶり厚さ  
最小かぶり厚さ：鉄筋組立後のかぶり厚さ  
2. \*印のかぶり厚さは、普通コンクリートに適用し、軽量コンクリートの場合は、特記による。  
3. 「仕上げあり」とは、モルタル塗り等の仕上げのあるものとし、仕上げ塗装、吹付け又は塗装等の鉄筋の耐久性上有効でない仕上げのものを除く。  
4. スラブ、梁、基礎及び擁壁で、直接土に接する部分のかぶり厚さには、格コンクリートの厚さを含まない。  
5. 杭基礎ベース筋のかぶり厚さは、杭先端からとする。  
6. 貫通孔部、及びびびり鉄筋発目地の目地底に接する鉄筋について最小かぶり厚さを確保する。  
7. 塩害を受ける恐れのある部分等、耐久性上不利な箇所のかぶり厚さは、特記による厚さを表４．１の数値に加える。

19 . . . 制定	工事名	番号
1999.7.1 改訂	西部地区小学校災害復旧工事	S-02
2008.4.1 改訂	図面名	縮尺
2011.4.1 改訂	鉄筋コンクリ - ト構造配筋標準図 [ 1 ]	
2017.4.1 改訂	設 計	
2020.4.1 改訂	輪島市教育委員会教員総務課	

# 鉄筋コンクリ - ト構造配筋標準図 [ 2 ]

## 4. 鉄筋のかぶり厚さ及びあき(続き)

### B. 鉄筋の相互のあき

- 鉄筋相互のあきは図4.1により、次の値のうち最大のもの以上とする。ただし、特殊な鉄筋継手の場合のあきは、特記による。
  - 粗骨材の最大寸法の1.25倍
  - 25mm
  - 隣合う鉄筋の平均径(呼名に用いた数値d)の1.5倍

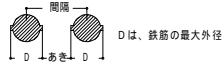


図4.1

- 鉄筋鉄筋コンクリート造の場合、主筋と平行する鉄骨とのあきは1.による。

### C. 鉄筋の保護

- 鉄筋の組立後、スラブ、梁等には、歩み板を置き渡し、直接鉄筋の上を歩かないようにする。
- コンクリート打込みによる鉄筋の乱れは、なるべく少なくする。特にかぶり厚さ、位置及び間隔の保持に努める。

## 5. 基礎・基礎梁

### A. 基礎

#### 1. 基礎の配筋要領

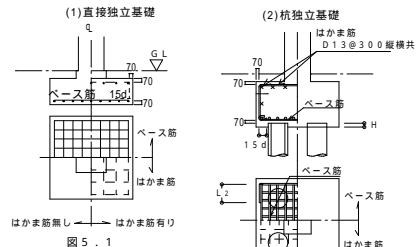


図5.1

#### (3)直接連続基礎(はかま筋無し)

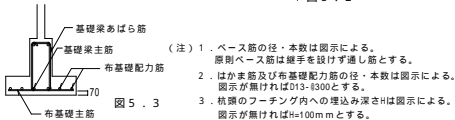


図5.3

#### 2. 杭頭の補強要領

杭頭補強の要領は図示による。PHC杭で図示が無い場合は図5.4による。  
(H:300の場合) (H:杭径かつ杭頭をカットしない場合)

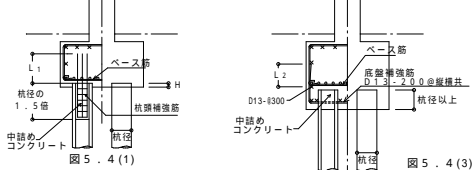


図5.4(1)

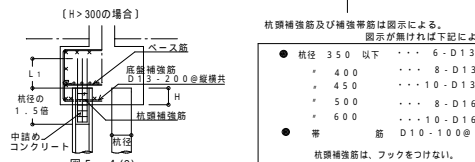
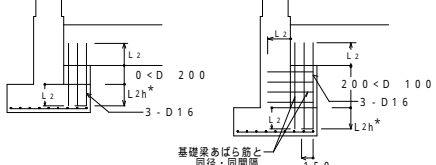


図5.4(2)

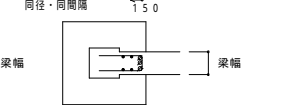
(注)1.中詰めコンクリートは、基礎のコンクリートと同じ調合のコンクリートを使用

### C. 基礎接合部の補強

- 基礎接合部の補強は、特記による。特記が無ければ図5.5による。



基礎梁あばら筋と同径・同間隔



\*L2hを確保できない場合は、標仕5.3.4(e)(3)によることができる。  
図5.5

### D. 基礎梁筋の継手及び定着

#### 1. 一般事項

- 梁筋は、原則として柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着する。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図5.6による。

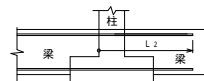


図5.6

- 梁筋を柱内に定着する場合は、標仕5.3.4(e)(2)による。
- 継手は原則として、コンクリートに常時圧縮応力が生じている部分、または応力の小さい部分に設ける。
- 継手は1か所に集中することなく、相互にずらして設けることを原則とする。

#### 2. 基礎梁に構造スラブがつかない独立基礎の場合

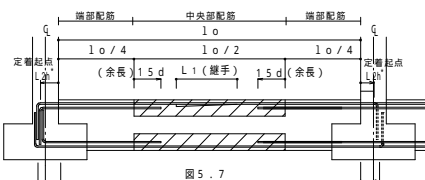


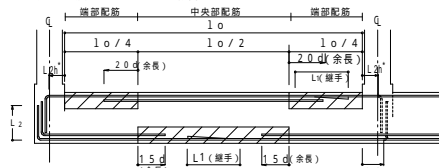
図5.7

#### 3. 基礎梁に構造スラブが付き独立基礎の場合



図5.8

## 4. 連続基礎及びべた基礎の場合



\*L2hを確保できない場合は、標仕5.3.4(e)(2)によることができる。

図5.9

- (注)
- 図示のない事項は、9.「大梁」による。
  - 印は、継手位置を示す。
  - 破線は、柱内定着の場合を示す。
  - ハッチ部分は、望ましい継手位置を示す。

### E. 基礎梁のあばら等

#### 1. 基礎梁のあばら筋

- 基礎梁のあばら筋の径及び間隔は、特記による。
- 基礎梁のあばら筋組立の形及びフックの位置は、10.「あばら筋等」による。ただし、梁せいが1.5m以上の場合は、図5.10によることができる。

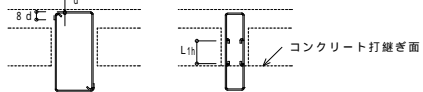


図5.10

- 腰筋及び幅止筋は、10.「あばら筋等」による。ただし、梁せいが1.5m以上の場合は、特記による。
- あばら筋の割付は、10.「あばら筋等」による。

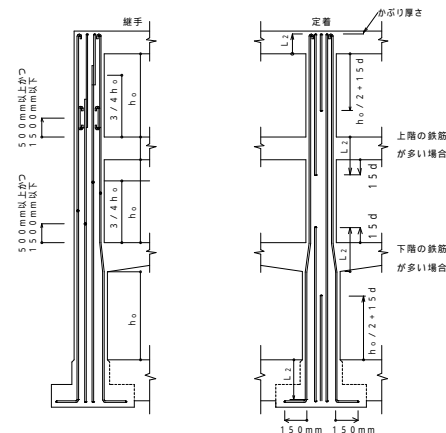
### F. 基礎梁の補強

- 打増し補強は、11.「梁の打増補強」による。
- 土間スラブ等の打増し補強は、13.「スラブ」(3)スラブ等の補強による。

## 6. 柱

### A. 柱の主筋

- 柱主筋の継手及び定着は、次による。
  - 継手及び圧接中心位置は、梁上端から500mm以上、1500mm以下、かつ、3/4h<sub>0</sub>(h<sub>0</sub>は柱の内法高さ)以下とする。
  - 重なる継手長さはL1とし、定着及び余長は図6.1による。ただし、柱頭定着長さL2が確保できない場合は、特記による。
- 電気設備の埋め込みボックス等は、柱の断面欠損となり、強度、耐久性の低下につながるため、原則として、埋め込まないこととする。やむを得ず埋め込む場合には、柱の打増し、乾式工法(軽鉄下地)等を検討する。また、配管についても1つの柱に集中させないようにするとともに、材軸方向と直交方向に配管する場合には柱の貫通は行わないこととする。
- 柱主筋にX形配筋を用いる場合は、「X形配筋部材の設計と施工(日本建築士事務所協会)」を参考にする。この場合、鉄筋の加工、組立は、特に精度よく行うこと。



- (注)
- 「鉄筋の組立・加工」で定めた鉄筋には、フックをつける。
  - 隣合う継手の位置は、表3.3による。
  - 継手、定着は、すべての階に適用できる。

図6.1

## 7. 帯筋

### A. 帯筋

- 帯筋は、原則としてH形とする。ただし、構造上重要な柱、独立柱等で特記するものはスパイラル筋とする。やむを得ず上記以外の方法とする場合はb、cによる。

(1)H形の135°曲げのフックが困難な場合は、W・I形とする。

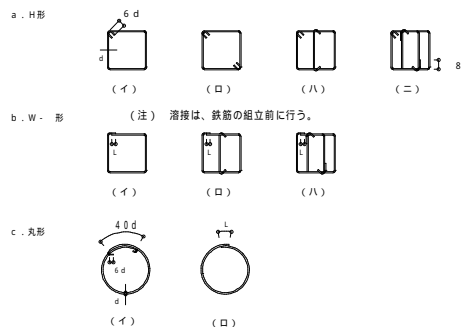


図7.2

- 溶接する場合の長さLは、両面フレア溶接の場合は5d以上、片面フレア溶接の場合は10d以上とする。溶接は設備の整った工場で行うことを原則とする。やむを得ず現場で溶接しなければならない場合には、十分に溶接できる作業条件と有資格者によって行うこととする。

19	制定	工事名	西部地区小学校災害復旧工事	番号	S-03
1999.7.1	改訂	図面名	鉄筋コンクリ - ト構造配筋標準図 [ 2 ]	縮尺	
2008.4.1	改訂	設計			
2011.4.1	改訂				
2017.4.1	改訂				
2020.4.1	改訂				

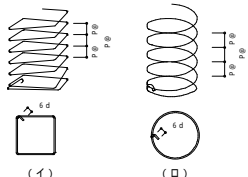
輪島市教育委員会教員総務課

# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図〔 3 〕

## 7. 帯筋（続き）

2. 帯筋をスパイラル筋とする場合、次のとおりとし、間隔は特記による。

S P形（スパイラル筋）



（注） S P形において、柱頭及び柱脚の端部は、1.5倍以上の添巻きを行う。

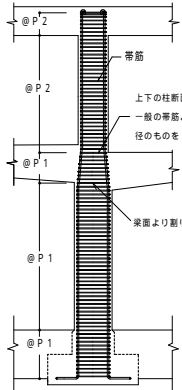
図 7. 1

- （1） スパイラル筋の重ね継手は長さ50 d以上、かつ、30 cm以上とし、その末端は90°フック余長12 d以上、または135°フック余長6 dとする。ただし、スパイラル筋の径は13 mm、またはD13以下を原則とする。

原則として角スパイラルは、柱断面が正方形または正方形に近い長方形のものに用いる。

3. フック及び継手の位置は、交互とする。

4. 帯筋の割付けは、特記による。特記が無い場合は、図 7. 2 による。



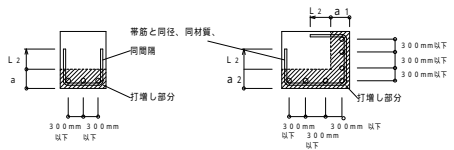
- （注）
- ・ 図示のない事項については、一般の場合に同じ。
  - ・ 柱梁接合部の帯筋は特記されたピッチで配筋する。なお、@ P 1、@ P 2 は、特記された帯筋の間隔を示す。
  - ・ 柱梁接合部は密実なコンクリート得られるように、締め固めを十分に行う。

図 7. 2

## 8. 柱の打増補強

### A. 柱の打増補強

1. 柱の打増しは、特記による。特記が無く、打増し幅が70 mm以上、200 mm以下の場合には図 8. 1 による。
2. 梁及び耐力壁の鉄筋の定着長さは、打増し部分を除いて算定する。



（a） 1方向の打増し （70 mm a、a1・a2 200 mmの場合）

図 8. 1

## 9. 大梁

### A. 大梁の主筋

1. 大梁主筋の継手及び定着の一般事項。

- （1） 継手及び圧接中心位置は、次による。

上端筋：中央Lo/2以内

下端筋：柱面よりせまい(D)以上離し、Lo/4以内

- （2） 継手長さはL1とし、定着長さ及び余長は図9. 3及び図9. 4による。

- （3） 梁主筋は、原則として柱をまたいで引き通すものとし、引き通すことができない場合は、柱内に定着することができる。ただし、やむを得ず梁内に定着する場合は、図9. 1による。

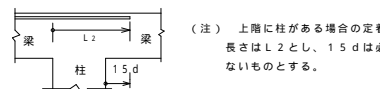


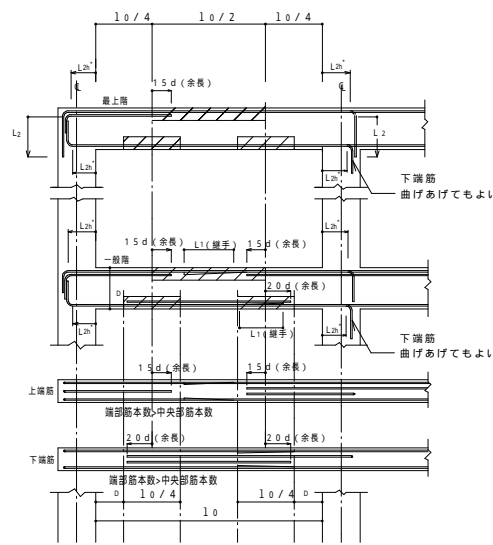
図 9. 1

- （4） 梁主筋を外柱内に定着する場合は、原則として梁の上端筋は下向き定着とし、下端筋は上向き定着とする。また、上端筋及び下端筋とも柱梁接合部における投影定着長さを柱せいの3/4倍以上とする。

- （5） 梁にハンチをつける場合、その傾斜は特記による。特記がなければ1:4とする。

2. ハンチのない場合の重ね継手及び定着は、図9. 2による。

u Lh：上端筋の水平定着長さ D：柱のせい  
1 Lh：下端筋の水平定着長さ  
u Lh 3/4 D、かつ1 Lh 3/4 Dとする。

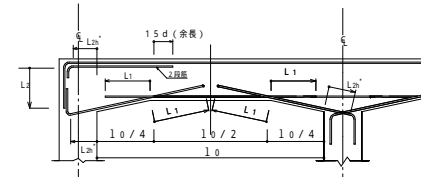


\* L2hを確保できない場合は、標仕5.3.4(e)(2)によることができる。

図 9. 2

- （注）
- ・ 2.「鉄筋の加工・組立て」で定めた鉄筋には、フックをつける。
  - ・ 印は、継手及び余長を示す。
  - ・ 破線は、柱内定着の場合を示す。
  - ・ ハッチ部分は望ましい継手位置を示す。

3. ハンチのある場合の定着は、図9. 3による。

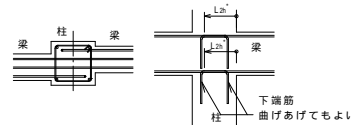


\* L2hを確保できない場合は、標仕5.3.4(e)(2)によることができる。

図 9. 3

- （注）
- ・ 2.「鉄筋の折り曲げ」で定めた鉄筋には、フックをつける。
  - ・ 印は、継手及び余長を示す。
  - ・ 梁内定着の端部が接近するときは、.....のように引き通すことができる。
  - ・ 破線は、柱内定着の場合を示す。

4. 水平段差のある場合の定着は、図9. 4による。

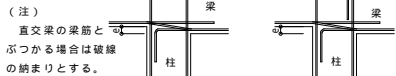


\* L2hを確保できない場合は、標仕5.3.4(e)(2)によることができる。

図 9. 4

5. 段違い梁の定着は、図9. 5による。

(e/D 1/6)



(e/D > 1/6)

直接定着できる場合、折曲げ定着とする必要はない



\* L2hを確保できない場合は、標仕5.3.4(e)(2)によることができる。

図 9. 5

6. 梁主筋にX形配筋を用いる場合は、「X形配筋部材の設計と施工（日本建築士事務所協会）」を参考にする。この場合、鉄筋の加工、組立は、特に精度よく行うこと。

## 10. あばら筋等

### A. あばら筋

1. あばら筋、腹筋及び幅止筋の一般事項。

- （1） あばら筋の種類、径及び間隔は、特記による。

- （2） 幅止筋及び受け用幅止筋は、D10@1000程度とする。

- （3） 腹筋に継手をつける場合の継手長さは、150 mm程度とする。

- （4） 壁梁の場合、腹筋の設定長さ及び継手長さは、特記による。特記がなければL2とする。

- （5） ハンチ基点のあばら筋の径、ピッチは特記による。

2. あばら筋組立の形及びフックの位置

- （1） 形は、図10. 1（イ）とする。ただし、L形梁の場合は、（ロ）又は（ハ）、T形梁の場合は（ロ）～（ニ）とすることができる。

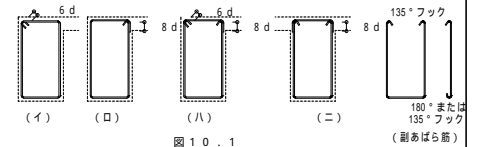


図 10. 1

- （2） フックの位置は（イ）の場合は交互とし、（ロ）の場合のL形ではスラブのつく側、T形では交互とする。なお（ハ）の場合はスラブのつく側を90°曲げとする。

3. あばら筋・腹筋の割付け

- （1） 間隔が一様で、ハンチの無い場合

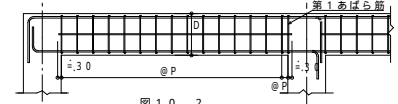


図 10. 2

- （2） 間隔が一様で、ハンチのある場合

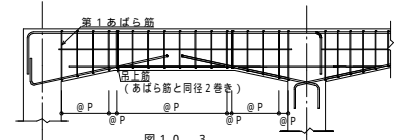


図 10. 3

- （3） 梁の端部で間隔の異なる場合

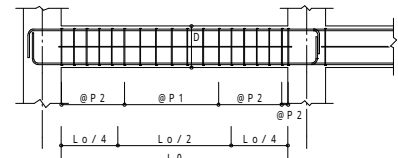


図 10. 4

- （注）
- ・ あばら筋は、柱面の位置から割り付ける。
  - ・ 図注の@ P 1、@ P 2 は、特記されたあばら筋の間隔を示す。

### B. 腹筋及び幅止筋

1. 一般の梁場合は図示による、図示が無い場合図10. 5による。

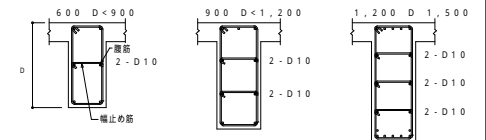


図 10. 5

以後梁成が300増す毎に1段増やす。

19 . . . 制定	工事名	番号
1999.7.1 改訂	西部地区小学校災害復旧工事	S-04
2008.4.1 改訂	図面名	縮尺
2011.4.1 改訂	鉄筋コンクリート構造配筋標準図〔 3 〕	
2017.4.1 改訂	設計	
2020.4.1 改訂	輪島市教育委員会教員総務課	



# 鉄筋コンクリート構造配筋標準図〔 5 〕

## 1 3 . スラブ（続き）

### 2 . 屋根スラブの補強

- （ 1 ） 屋根スラブの出隅及び入隅部分には、図 1 3 . 1 1 により、補強筋を上端筋の下側に配置する。

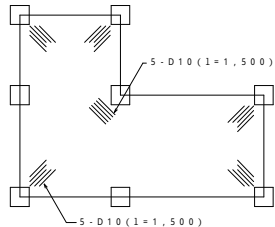


図 13. 11

### 3 . 土間スラブの打継ぎ補強

- （ 1 ） 基礎梁とスラブを一体打ちとしなくて、打継ぎを設ける場合の補強は、特記による。特記がなければ、図 1 3 . 1 2 による。ただし、土間スラブとは、土に接するスラブをいう。

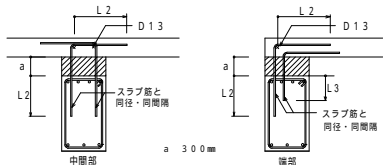


図 13. 12

### 4 . 土間コンクリートの補強

- （ 1 ） 土間コンクリートの補強筋は、特記による。なお、基礎梁との接合部は、図 1 3 . 1 3 による。

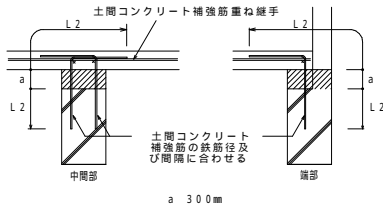


図 13. 13

### 5 . 段差のあるスラブの補強

- （ 1 ） 段差のあるスラブの補強は図示による。図示が無ければ図 1 3 . 1 4 による。

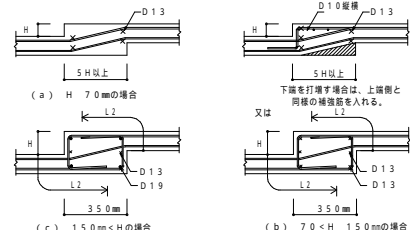


図 13. 14

## 1 4 . 階段の配筋

### A . 階段

- 1 . 階段の配筋は、特記による。  
2 . 階段の配筋方法は、図 1 4 . 1 による。

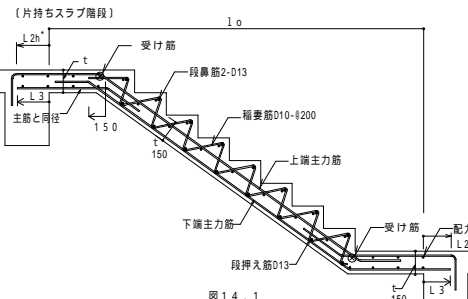
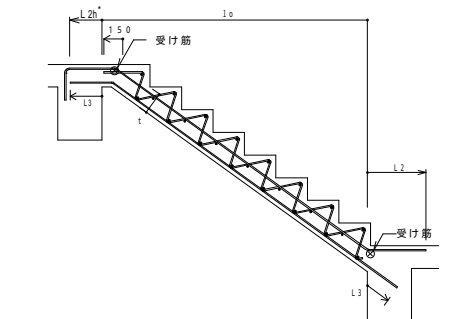
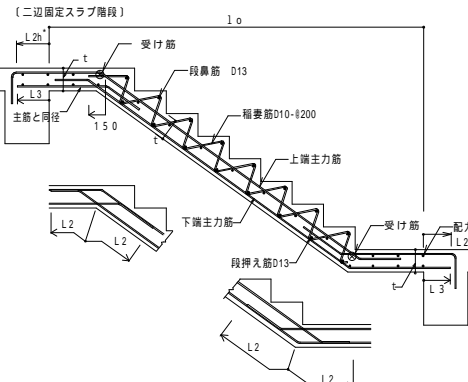


図 1 4 . 1

表 1 4 . 1 階段受壁の縦筋（L：片持ち階段の寸法）

壁 厚	L 1200	1200<L 1500	1500≦L 1800
180	D13-1200ダブル	D13-1150ダブル	D13-1150ダブル
200, 220			
250	D13-1200ダブル	D13-1200ダブル	D13-1200ダブル

- 3 . 片持ちスラブ階段の配筋方法は、図 1 4 . 2 による。  
4 . 片持ちスラブ形階段のいらず筋は、D 1 0 @ 2 0 0 とし、受け壁面より 5 0 mm のところに第 1 いらず筋を配筋する。

- （ 注 ） ・ 階段主筋は、壁の中心線を越えてから縦に降ろす。

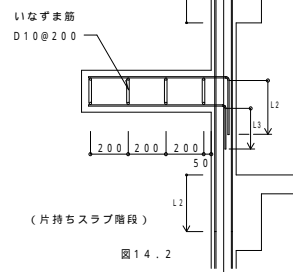


図 14. 2

## 1 5 . 梁貫通

### A . 梁貫通孔の補強

- 1 . 梁貫通孔の補強は、特記による。特記がなければ、次による。

- （ 1 ） 梁貫通孔補強筋の名称は、図 1 5 . 1 による。  
（ 2 ） 孔の径は、梁せいの 1 / 3 以下とし、孔が円形でない場合はこれの外接円とする。  
（ 3 ） 孔の上下方向の位置は、梁せい中心付近とし、梁中央部下端は梁下端より 1 / 3 D の範囲には設けてはならない。  
（ 4 ） 孔は、柱面から原則として、1.5 D（D は梁せい）以上離す。ただし、基礎梁、壁付帯梁は除く。  
（ 5 ） 孔が並列する場合は、その中心間隔は、孔の平均値の 3 倍以上とする。  
（ 6 ） 縦筋及び上下縦筋は、あばら筋の形に配筋する。  
（ 7 ） 補強筋は、主筋の内側とする。また、鉄筋の定着長さは、図 1 5 . 2 による。  
（ 8 ） 孔の径が梁せいの 1 / 1 0 以下、かつ、1 5 0 mm 未満のものは、鉄筋を緩やかに曲げることににより、開口部を避けて配筋できる場合は、補強を省略することができる。  
（ 9 ） 溶接金網の余長は 1 格子以下とし、突出しは 1 0 mm 以上とする。  
（ 1 0 ） 溶接金網の貫通孔部分には、鉄筋1-13 のリング筋を取りつける。なお、リング筋は、溶接金網に 4 箇所以上溶接する。  
（ 1 1 ） 溶接金網の割付け始点は、横筋ではあばら筋の下側とし、縦筋では貫通孔の中心とする。

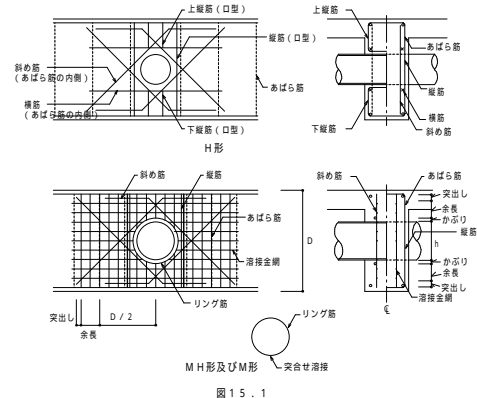


図 1 5 . 1

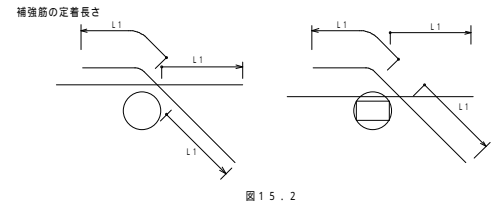


図 15. 2

- （ 1 2 ） 補強形式は表 1 5 . 1 ~ 表 1 5 . 3 により、配筋種別は特記による。選定方法は、建設大臣官庁営繕部監修「建築構造設計規準及び同解説」による。

### （ a ） H 形配筋

表 1 5 . 1 H 形配筋

配筋種別	斜め筋	縦 筋	横 筋	上下縦筋	配 筋 図
H1	2 - 2 - D13	なし	なし	なし	
H2		2 - 2 - D13			
H3	4 - 2 - D13	2 - 2 - D13	2 - 2 - D13	2 - 2 - D13	
H4	4 - 2 - D16				
H5	4 - 2 - D16	4 - 2 - D13	2 - 2 - D13	3 - 2 - D13	
H6	4 - 2 - D19				
H7	4 - 2 - D22				

（ 注 ） ----- は、一般部のあばら筋を示す。

### （ b ） M 形配筋

表 1 5 . 2 M 形配筋

配筋種別	縦 筋	溶接金網	リング筋	配 筋 図
M1	2 - 2 - D13	なし	なし	
M2	4 - 2 - D13			
M3	4 - 2 - D13	2 - 6 - 100@	13	
M4	6 - 2 - D13			

（ 注 ） ----- は、一般部のあばら筋を示す。

19	制定	工事名	西部地区小学校災害復旧工事	番号	S - 06
1999.7.1	改訂	図面名	鉄筋コンクリート構造配筋標準図〔 5 〕	縮尺	
2008.4.1	改訂	設計	輪島市教育委員会教員総務課		
2011.4.1	改訂				
2017.4.1	改訂				
2020.4.1	改訂				

鉄筋コンクリート構造配筋標準図〔 6 〕

15. 梁貫通（続き）

（ C ） MH 形配筋

表 15.3 MH 形配筋

配筋種類	斜め筋	縦筋	溶接金剛	リング筋	配筋図
MH1	2・2-D13	なし	なし	なし	
MH2		2・2-D13			
MH3	2・2-D13	2・2-D13	2・6 -100@	13	
MH4	4・2-D13				
MH5	4・2-D16				
MH6	4・2-D16	4・2-D13	2・6 -100@	13	
MH7	4・2-D19				

（注）----- は、一般部のあば筋を示す。

配筋の表示

凡例	配筋
斜め筋 4・2-D22	4本のD22が2面入ることを示す
縦筋 4・2-D13	4本のD13があば筋状に孔の両側に2本づつ入ることを示す
上下縦筋 3・2-D13	孔の上下の部分にそれぞれD13のあば筋が3本入ることを示す
溶接金剛 2・6 -100@	6 -100@の溶接金剛が2面入ることを示す。

- 建設技術評価規定第9条1項の規定に基づき建設大臣が評価している製品を使用する場合、または、建設省の技術評価が行われた後、開発され又は改良され、（財）日本建築センターにより評価された製品を使用する場合は、製品の形式による適用範囲のほか、施工上の留意事項も確認すること。
- 梁貫通筋は、原則として、せん断力の大きいところは避けて設け、必要に応じて適切な補強を行う。また、梁には、原則として、配管等の埋設を行わない。

16. 壁、その他

A. 壁

1. 一般事項

- 配筋可能な限り継手は設けない加工とする。
- 壁筋の重ね継手長さはL1とし、定着長さはL2とする。
- 一般部壁筋の配筋は、図16.1による。

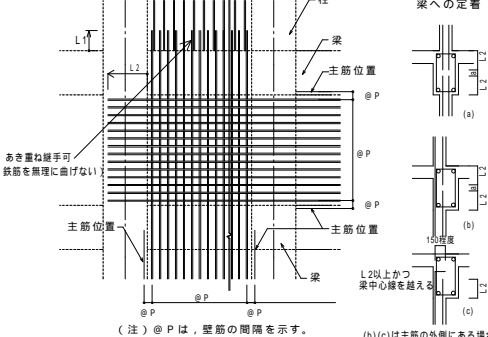


図 16.1

図 16.2

- 原則として、継手は柱・梁の中には設けないこと。
- 横筋の場合は、1スパンごとに柱に定着することは差し支えない。
- 土圧等の面外力を受ける壁の場合は、圧縮側の位置に継手を設ける。
- 重ね継手及び定着の長さがとれない場合は、監督職員の承諾を受けて、両面フレア溶接の場合は5d以上、片面フレア溶接の場合は10d以上とすることができる。
- 幅止め筋は、縦、横ともD10@1,000程度とする。

- 壁の配筋は特記により、その定着は図16.3による。
- 壁の交差部の補強筋及び端部の補強筋は、特記がなければD13とする。

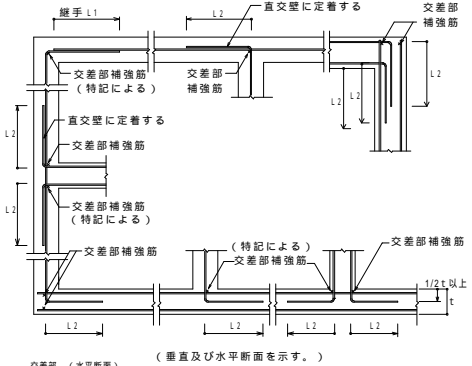


図 16.3

- 壁の開口補強筋は特記による。定着長さは、図16.4による。

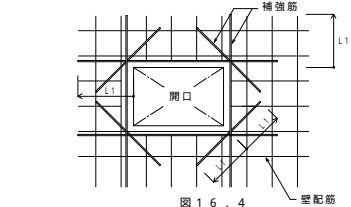


図 16.4

- 片持ちスラブ形階段を受ける壁の縦筋は、横筋の外側に配筋する。
- コンセントボックス等を壁に埋め込む場合の補強は、特記による。
- 壁の打増し補強筋は特記による。特記が無く、打増厚さが50mm以上、200mm以下の場合は図16.5による。

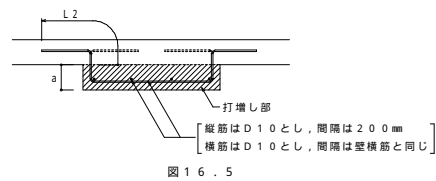


図 16.5

B. バラベット

- バラベットの配筋は、特記による。特記が無く、高さhが800以下の場合は図16.6による。
- バラベットの配筋は、原則として複配筋とし、端部には補強筋を配筋すること。

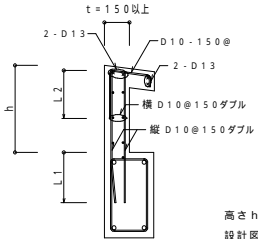


図 16.6

C. コンクリートブロック積壁

1. 控壁

- 壁の配置及び配筋は、特記による。
- 特記が無い場合、配筋は図16.7による。

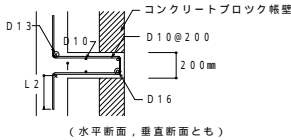


図 16.7

- 積壁が土間コンクリート上に設置される場合の補強は、図16.8による。

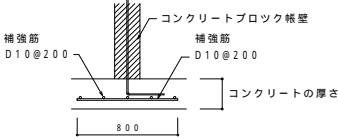


図 16.8

D. 機械吊上げ用フック

- 梁に設ける機械吊上げ用フックは表16.1、図16.9により、種別は特記による。

表 16.1 機械吊上げ用フック

種別	A 種	B 種	C 種
フック筋	2.5又はD2.5	2.2又はD2.2	1.9又はD1.9
曲げ内のり直径 (mm)	100		
補強かんざし筋	2-D16		
補強筋 (mm)	D16, L=900	D16, L=750	D16, L=600
吊上げ荷重 (KN)	50 W>30	30 W>10	10 W

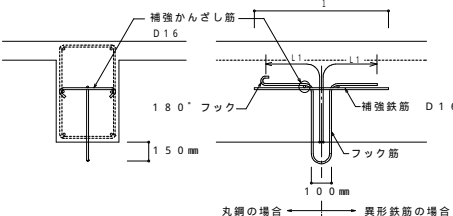


図 16.9

E. コンクリートブロック塀

- ブロック塀の配筋は、特記による。
- 塀の高さ（地盤面に高低差のある場合は低い方による）は2.2m以下とする。
- 塀の厚さは、塀の高さ2m以下は12cm以上、2mを超える場合は15cm以上とする。

- 地盤が液状化の恐れのある砂質土および軟弱土の場合は、別途検討する。
- 鉄筋挿入部はモルタルを充てんする。

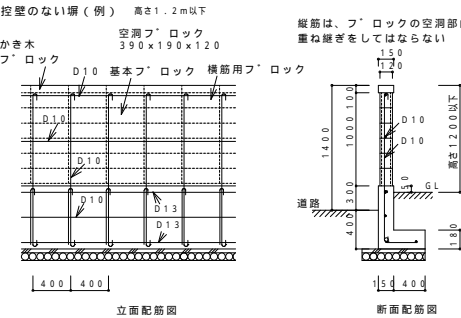


図 16.10

17. 増築用の配筋

A. 増築用の配筋

- 将来増築予定の打増部分の配筋は、特記による。

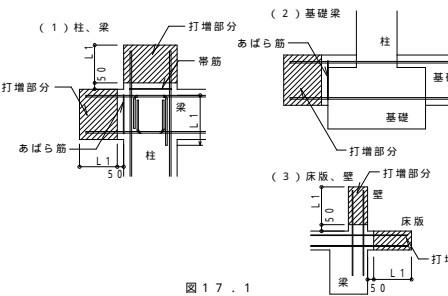
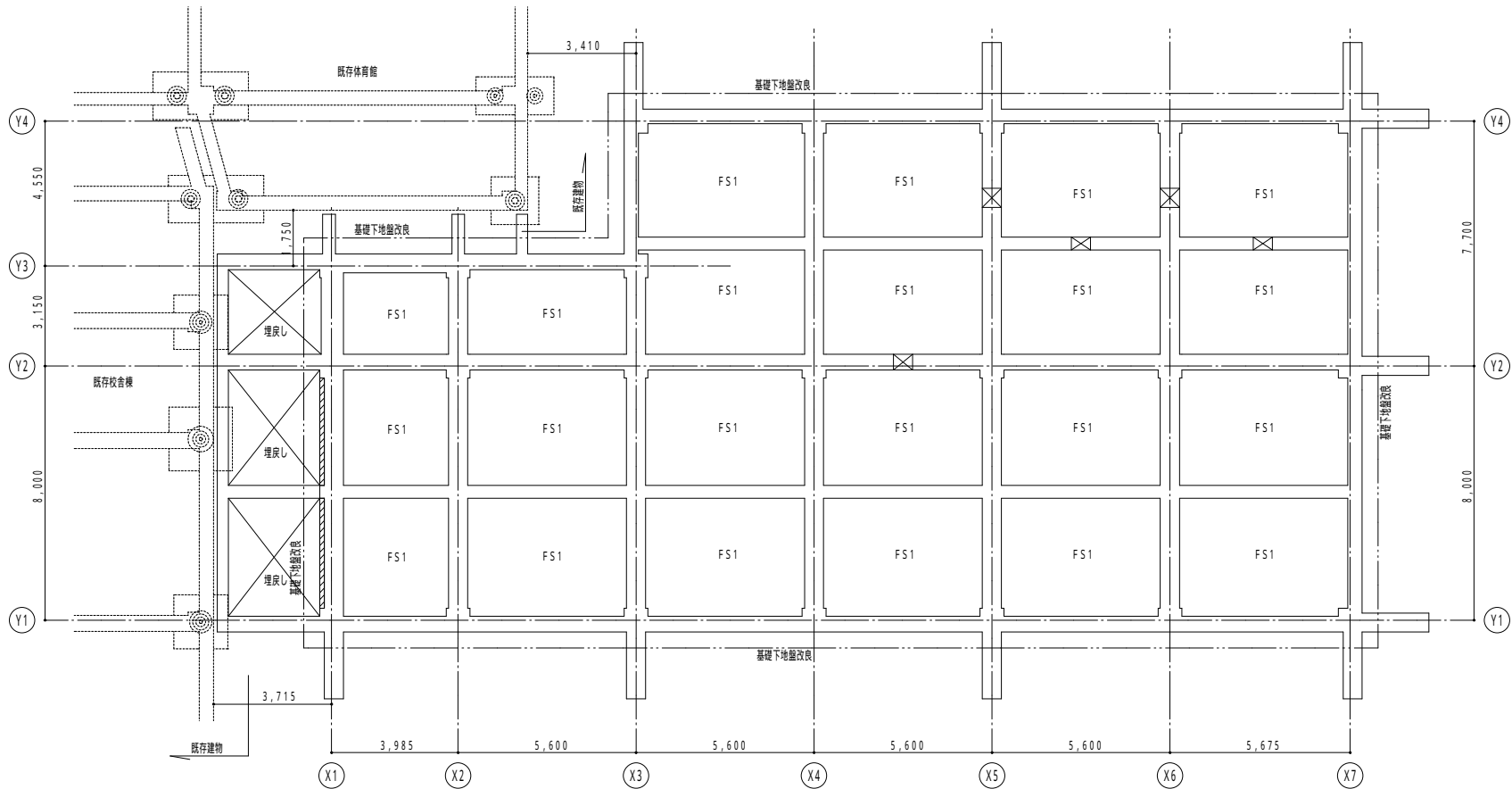



図 17.1

19. . . 制定	工事名	番号
1999.7.1 改訂	西部地区小学校災害復旧工事	S-07
2008.4.1 改訂	図面名	縮尺
2011.4.1 改訂	鉄筋コンクリート構造配筋標準図〔 6 〕	
2017.4.1 改訂	設計	
2020.4.1 改訂		

輪島市教育委員会教員総務課



【特記事項】

- ・特記無き基礎下端レベルは1FL-2,150とする。
- ・ピット底版FS1天端レベルは1FL-1,850とする。
- ・ は人通り 600を示す。
- ・基礎下については浅層混合地盤改良を行う。
- ・地盤改良余幅は500、改良厚は1,000とする。



株式会社 釣谷建築事務所

1級建築士 第119816号 吉田 典生

有限会社 後藤構造設計事務所

1級建築士 第343527号  
構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣

製作年月日  
26.03

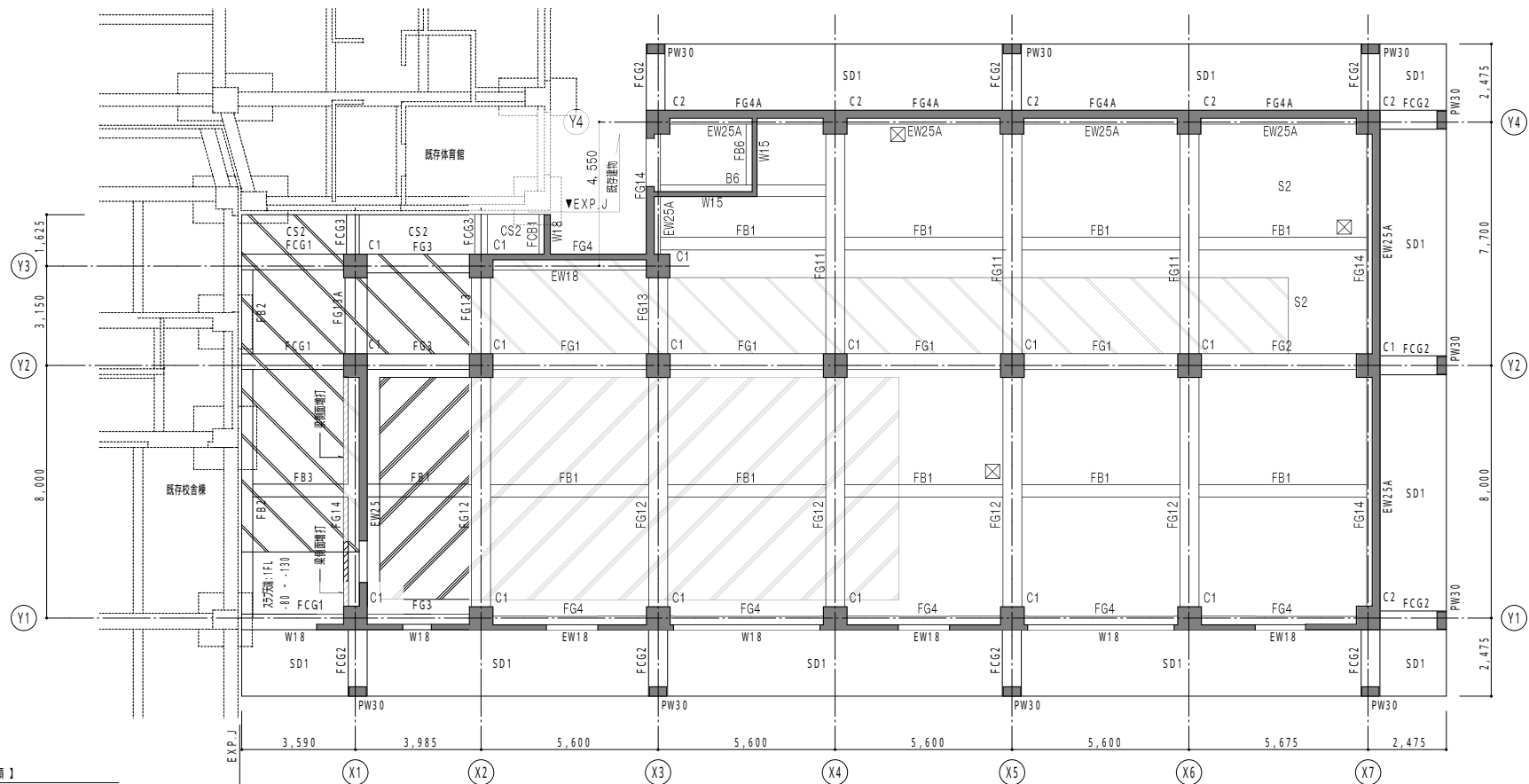
設計番号  
25-42

図面番号  
S-08





工事名称  
西部地区小学校災害復旧工事  
図面名称  
基礎伏図

縮尺  
1/150





【特記事項】

- ・特記無きスラブ符号はS1とする。
- ・特記無きスラブ天端レベルは1FL-10とする。
- ・  範囲のスラブ天端レベルは1FL-150とする。
- ・  範囲のスラブ天端レベルは1FL-40とする。
- ・土間コンクリート SD1躯体天端は1FL-100~-150
- ・基礎大梁・片持梁・基礎小梁 (FB1) 天端は1FL-350
- ・その他の基礎小梁天端はスラブ下端とする。
- ・  は床点検口を示す。
- ・土間コンクリート下は地盤改良I=500とする。
- ・  は壁スリットを示す。
- ・既存とのEXP.Jクリアランスは100とする。



株式会社 鈞谷建築事務所

1級建築士 第119816号 吉田 典生

有限会社 後藤構造設計事務所

1級建築士 第343527号  
構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣

製作年月日

26.03

設計番号

25-42

図面番号

S-09

工事名称

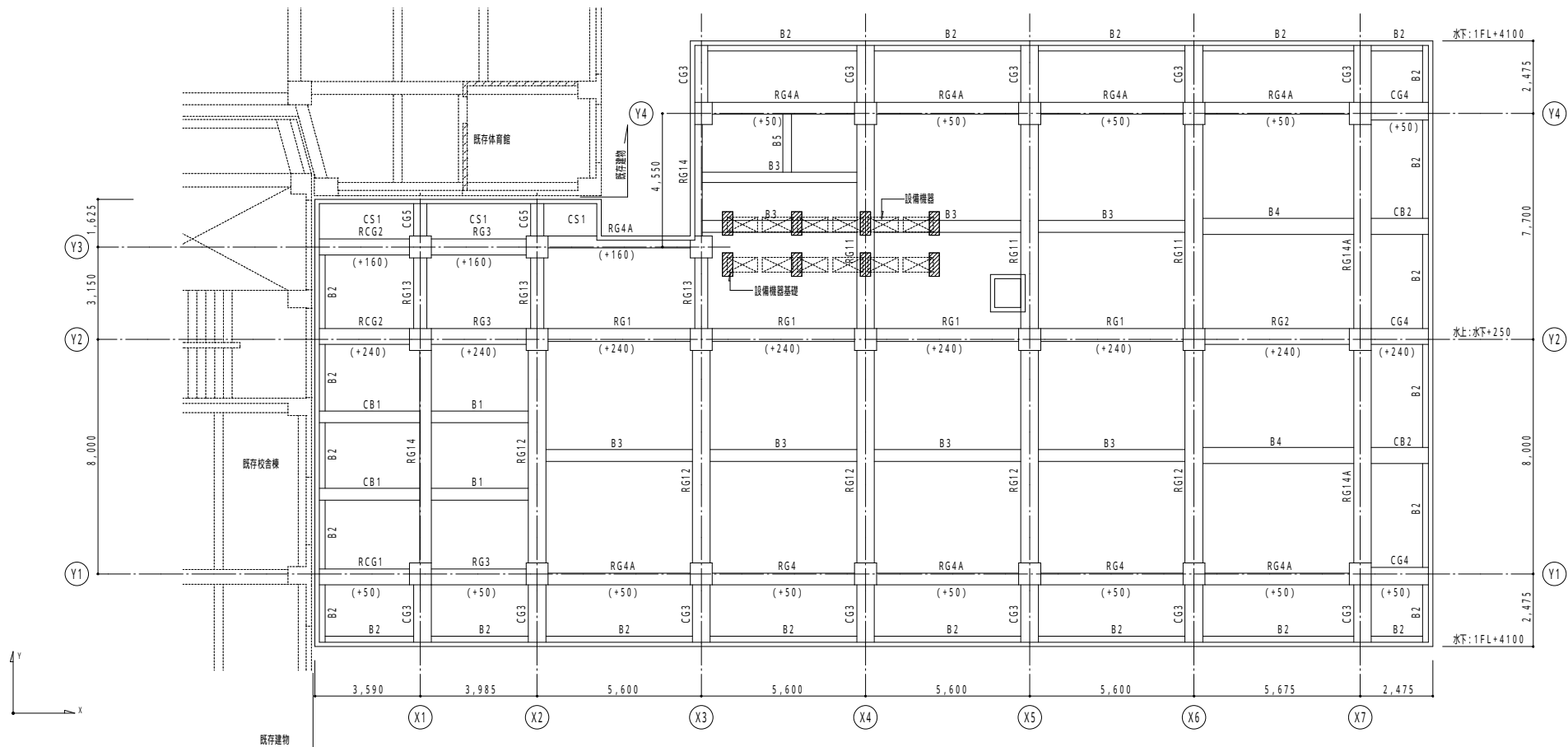
西部地区小学校災害復旧工事

図面名称

1階床梁伏図

縮尺

1/150



【特記事項】

- ・特記無きスラブ符号はS1とする。
- ・ ( ) 内はRFL水下からの梁天端レベルを示す。



株式会社 鈞谷建築事務所

1級建築士 第119816号 吉田 典生

有限会社 後藤構造設計事務所  
1級建築士 第343527号  
構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣

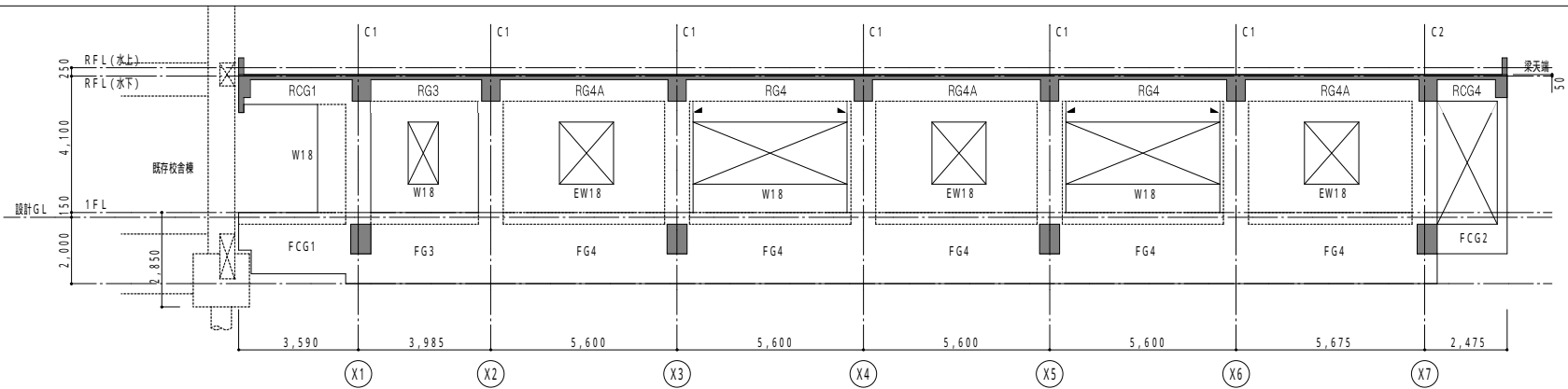
製作年月日  
26.03

設計番号  
25-42

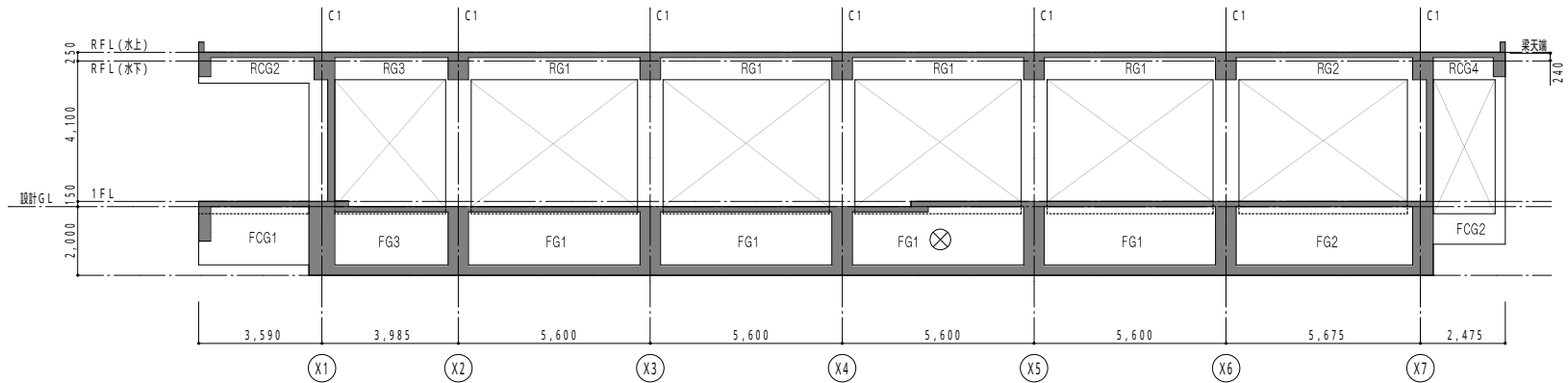
図面番号  
S-10

工事名称  
西部地区小学校災害復旧工事  
図面名称  
R階床梁伏図

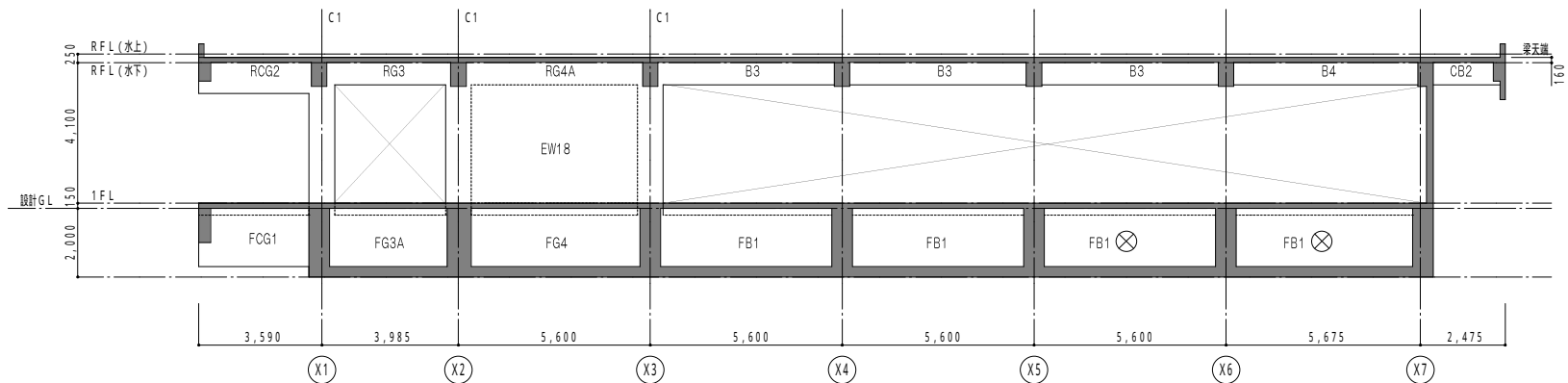
縮尺  
1/150



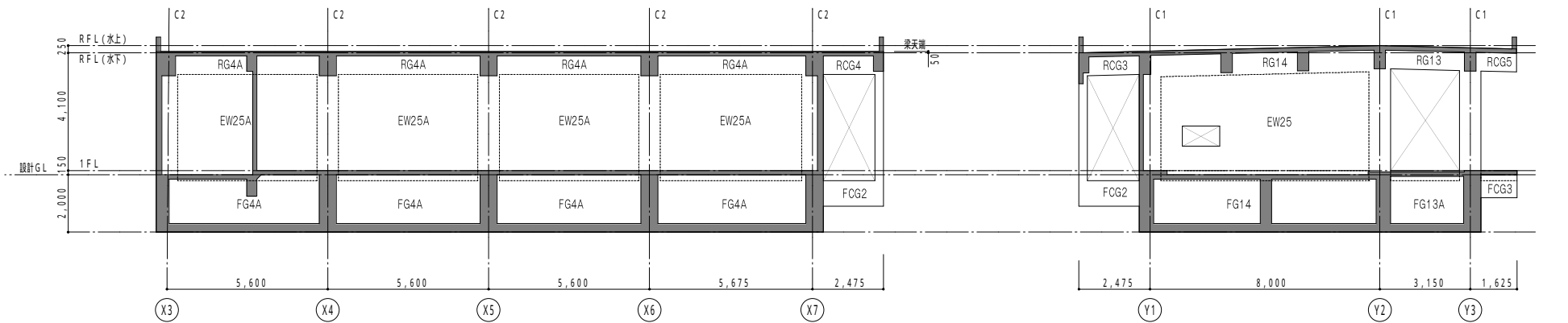
Y 1 通 軸組図 は壁スリットを示す。



Y 2 通 軸組図

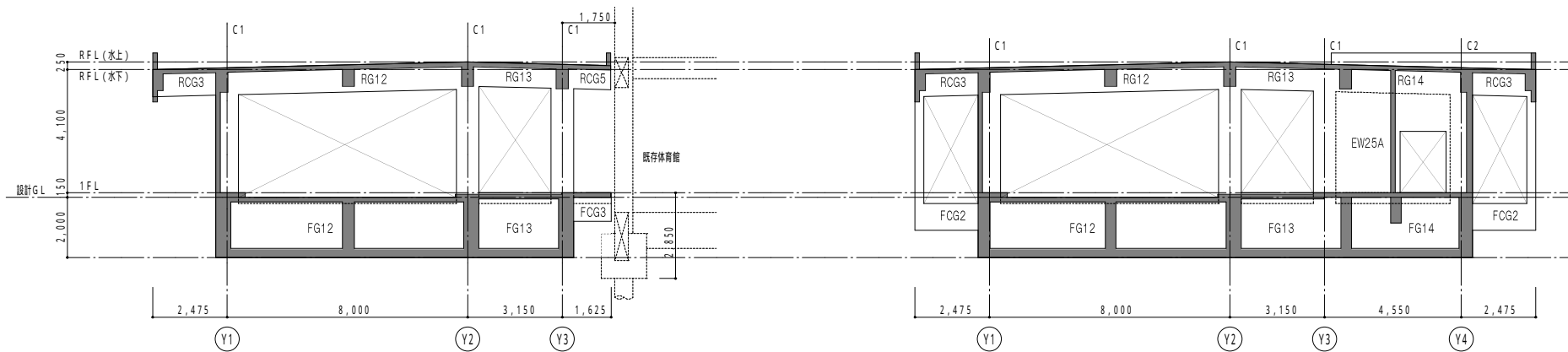


Y 3 通 軸組図



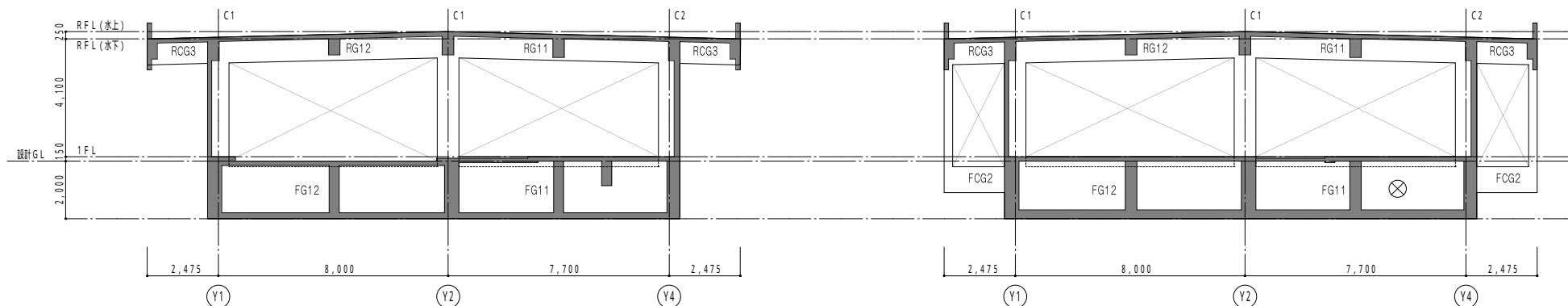
Y 4 通 軸組図

X 1 通 軸組図



X 2 通 軸組図

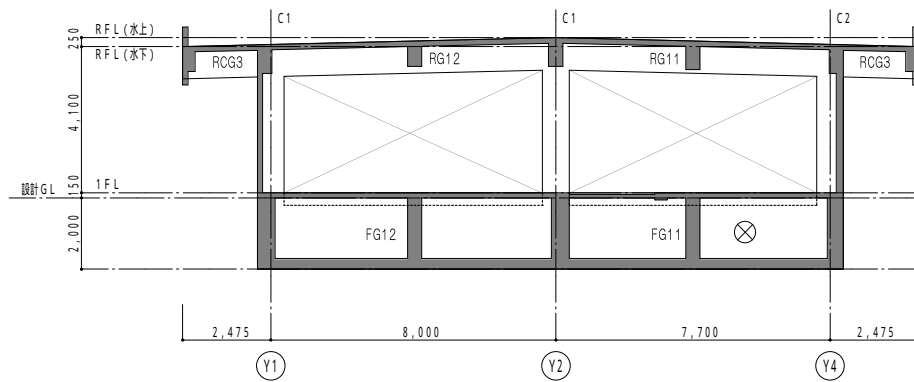
X 3 通 軸組図



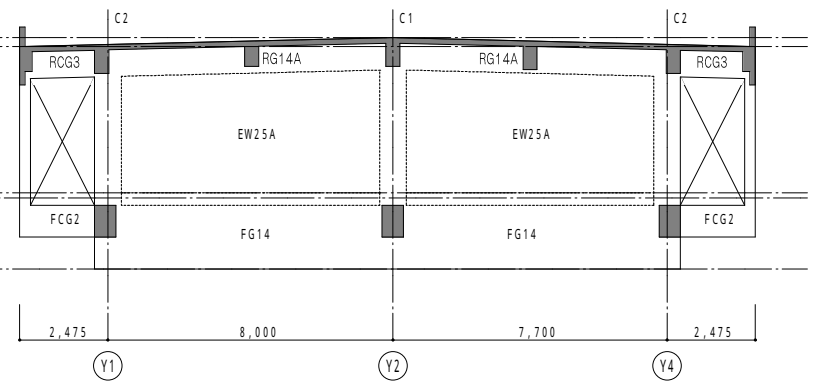
X 4 通 軸組図

X 5 通 軸組図





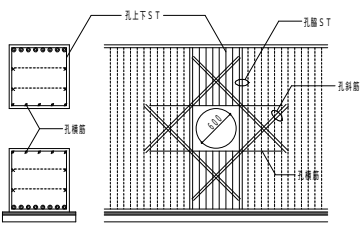
X 6 通 軸組図



X 7 通 軸組図



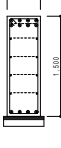
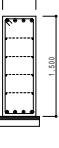


べた基礎断面リスト					
符 号	スラブ厚	部 位	短辺方向	長辺方向	備 考
FS1	300	上端筋	D16@125	D16@125	
		下端筋	D16@125	D16@125	
特記事項	基礎下地層は、捨てコン厚50・砕石厚100とする。				

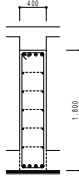





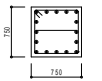
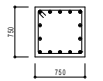

基礎梁入通孔補強				
梁符号	孔斜筋	孔筋ST	孔横筋	孔上下ST
FG1・FG11	2・2-D25	2・ -2-D13	2-D16	-2-D13@100
F81	2・2-D19	2・ -2-D13	2-D16	-2-D13@100











基礎梁入通孔補強要領図










基礎梁断面リスト										
符 号	FG1・FG2・FG4	FG3	FG3A	FG4A	FG11・FG12	FG13	FG13A	FG14		
位 置	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面	全断面		
断 面										
	寸 法	500 X 1,800	500 X 1,800	600 X 1,800	450 X 1,800	600 X 1,800	600 X 1,800	700 X 1,800	600 X 1,800	
	上端筋	4-D25	4/2-D25	4/2-D25	3-D25	5/4-D25	5/2-D25	5/2-D25	3-D25	
	下端筋	4-D25	4/2-D25	4/2-D25	3-D25	5/4-D25	5/2-D25	5/2-D25	3-D25	
	あばら筋	2-D13@200	4-D16@150	4-D16@100	2-D13@200	2-D13@200	4-D16@150	4-D16@100	2-D13@200	
	腰 筋	10-D10	10-D10	10-D10	10-D10	10-D10	10-D10	10-D10	10-D10	
	備 考									
特記事項	梁天端レベルは1FL・35.0とする。									
	梁主筋位置は、X方向（Y符号通）がY方向（X符号通）の下部とする。									














片持基礎梁断面リスト					
符 号		FCG1		FCG2	FCG3
位 置		基端	先端	全断面	全断面
断 面					
	寸 法		500 X 1,500	600 X 900	400 X 600
	上端筋		4/4-D25	4-D25	3-D25
	下端筋		4-D25	4-D25	3-D25
	あばら筋		2-D13@200		2-D13@200
	腰 筋		8-D10		4-D10
	備 考				
特記事項		基礎梁天端レベルは1FL・3.50とする。			

基礎小梁断面リスト					
符 号	FB1	FB2	FB3	FCB1	
位 置	全断面	全断面	全断面	全断面	
断 面					
	寸 法	400 X 1,800	350 X 800	300 X 500	400 X 600
	上端筋	4-D25	3-D22	3-D22	3-D22
	下端筋	4-D25	3-D22	3-D22	3-D22
	あばら筋	2-D13@200	2-D10@200	2-D10@200	2-D13@200
	腰 筋	10-D10	2-D10		2-D10
	備 考				片持梁
特記事項	梁天端レベルはスラブ下端とする。				

柱断面リスト			
符 号	C1	C2	
断 面			
寸 法	750 X 750	750 X 750	
主 筋	X 5-D25	4-D25	
	Y 5-D25	5-D25	
巻 筋	X 3-D13@100	2-D13@100	
	Y 2-D13@100	2-D13@100	
備 考	仕口内等筋はX・Y方向共2・D13@100とする。		
特記事項	主筋頂部は全てフック付きとする。		

大梁断面リスト											
符 号	RG1	RG2		RG3	RG4・RG4A	RG11・RG12		RG13	RG14	RG14A	
位 置		X 6 通端      中央・X 7 通端		全断面	全断面	周 端	中 央	全断面	全断面	全断面	
断 面											
	寸 法	450 X 800	550 X 800		550 X 800	400 X 800	600 X 900		500 X 700	400 X 900	600 X 900
	上端筋	4-D25	5-D25	5/2-D25	5/2-D25	3-D25	5/3-D25	5-D25	4-D25	3-D25	5-D25
	下端筋	4-D25	5-D25	5-D25	5-D25	3-D25	5-D25	5/3-D25	4-D25	3-D25	5-D25
あばら筋	2-D13@200	2-D13@200		4-D13@150	2-D13@200	2-D13@150		4-D13@100	2-D13@200	2-D13@200	
巻 筋	4-D10	4-D10		4-D10	4-D10	4-D10		2-D10	4-D10	4-D10	
備 考											
特記事項	梁主筋位置は、X方向（Y符号通）がY方向（X符号通）の下部とする。										

片持梁断面リスト									
符 号	CG1		CG2		CG3		CG4		CG5
位 置	基端	先端	基端	先端	基端	先端	基端	先端	全断面
断 面									
寸 法	550 X 900		550 X 900		600 X 900		550 X 800		500 X 700
上端筋	5/5-D25	5-D25	5/3-D25	5-D25	5/2-D25	5-D25	5/2-D25	5-D25	4-D25
下端筋	5-D25	5-D25	5-D25	5-D25	5-D25	5-D25	5-D25	5-D25	4-D25
あばら筋	2-D13@200		2-D13@200		2-D13@200		2-D13@200		2-D13@200
巻 筋	4-D10		4-D10		4-D10		2-D10		2-D10
備 考									
特記事項									

小梁断面リスト													
符 号	B1		B2	B3	B4		B5	B6		CB1		CB2	
位 置	X 1 通端	中央・X 2 通端	全断面	全断面	X 6 通端・中央	X 7 通端	全断面	両端	中央	基礎	先端	基礎	先端
断 面													
寸 法	550 X 800		350 X 700	400 X 800	550 X 800		300 X 500	300 X 650		550 X 800		550 X 800	
上端筋	5/3-D25	5-D25	3-D22	4-D22	5-D25	5/2-D25	3-D22	3-D22	3-D22	5/3-D25	5-D25	5/2-D25	5-D25
下端筋	5-D25	5-D25	3-D22	4-D22	5-D25	5-D25	3-D22	3-D22	3/3-D22	5-D25	5-D25	5-D25	5-D25
あばら筋	2-D13@200		2-D10@200	2-D13@200	2-D13@200		2-D10@200	2-D10@200		2-D13@200		2-D13@200	
巻 筋	2-D10		2-D10	2-D10	2-D10			2-D10		2-D10		2-D10	
備 考													
特記事項													

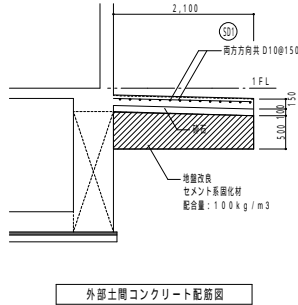
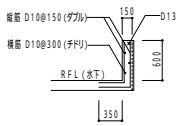
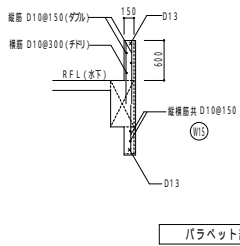
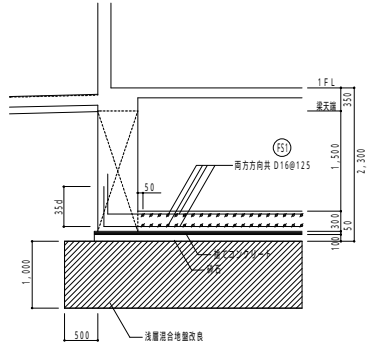
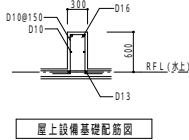
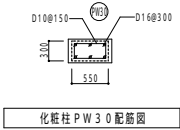
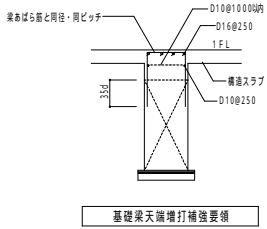
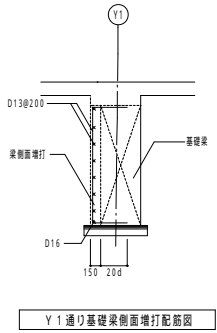


スラブ断面リスト					
符 号	スラブ厚	部 位	短辺方向	長辺方向	備 考
S1	150	上端筋	D10D13@200	D10D13@200	
		下端筋	D10@200	D10@200	
S2	150	上端筋	D10D13@150	D10D13@200	
		下端筋	D10@150	D10@200	
CS1	150	上端筋	D13@100	D10@200	片持スラブ
		下端筋	D10@100	D10@200	
CS2	180	上端筋	D13@100	D10@200	片持スラブ
		下端筋	D10@100	D10@200	
SD1	150+10(増打)	上端筋	D10@150	D10@150	土間下地盤改良 1層 土間コンクリート
		下端筋	D10@150	D10@150	
特記事項	土に接するスラブ下地盤は、砕石厚100とする。				

壁断面リスト					
壁厚180以上の壁について、幅止め筋はD10-1箇所/m程度とする。					
符 号	W15	W18	EW18	EW25	EW25A
断 面					
壁 厚	150	180	180	250	250
縦主筋	D10@150 (シングル)	D10@200 (ダブル)	D10@200 (ダブル)	D13@200 (ダブル)	D13@100 (ダブル)
横主筋	D10@150 (シングル)	D10@200 (ダブル)	D10@200 (ダブル)	D13@200 (ダブル)	D13@200 (ダブル)
開口補強縦筋	2-D13	4-D13	4-D16	4-D16	6-D16
開口補強横筋	2-D13	4-D13	6-D16	6-D16	6-D16
開口補強斜筋	2-D13	2-D13	2-D13	2-D13	2-D13
備 考	内壁	外壁	外壁 耐震壁	外壁 耐震壁	外壁 耐震壁

完全スリット配置要領

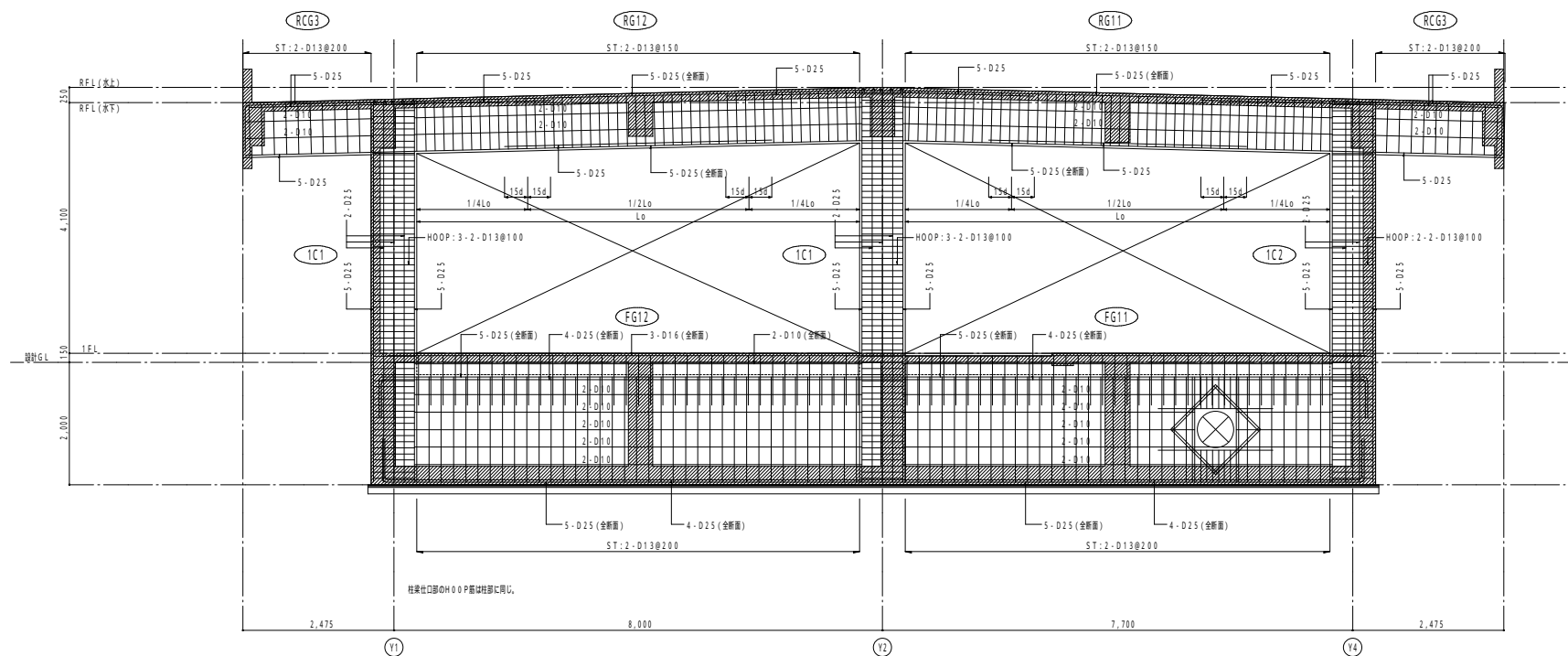
- 図はスリットの配置例を示している。実際のスリット位置は設計図による。
- スリット部分のアンカー幅はD13@200とする。
- スリット部分の鉄筋等のかぶり厚さは30mm以上とする。
- アンカー部には防錆処理を施すこと。
- スリット幅は、水平・斜交スリット共に25mmとする。
- スリット部は耐火シール充填とする。
- スリット材は耐火板（耐火）で全貫通型とする。



べた基礎部分配筋図

断面リスト 特記事項
特記筋きり、梁の巾止め筋はD10@1000以内とする。
土に接する梁下地盤は、捨てコン厚50・砕石厚100とする。
鉄体のコンクリート強度はFC24とする。
鉄筋材種はD16以下:SD295、D19-D25:SD345





X 6 通架構詳細配筋圖

浅層混合地盤改良特記仕様書

1. 工事概要

本地業はセメント固化材を用いた機械式攪拌浅層混合処理工法による地盤改良地業である。  
この工法は、セメント系固化材を原地盤と攪拌混合し、原地盤を固化する方法によって地盤改良を行うものである。

2. 一般事項

本地業は本特記仕様書によるほか、「改訂版 建築物のための改良地盤の設計及び品質管理指針 2018年版」  
（（財）日本建築センター、以下指針という）による。

3. 特記事項

- （1）掘削深度、掘削範囲等は設計図書による。  
配合等について土質や地盤により変更した方が適切と判断される場合は監督員の承認の上に変更することができる。
- （2）設計基準強度は  $F_c=300\text{N/m}^2$  とする。
- （3）設計の要求する性能を確保するため、適切な配合管理、施工管理及び品質管理を実施する。
- （4）セメント系固化材を用いた機械式攪拌浅層混合処理工法も専門工事会社を工事施工業者とする。
- （5）固化材と改良対象土を確実に混合攪拌することのできる施工機械を用いる。

4. 施工計画

工事に先立ち、施工計画書を監督員に提出する。施工計画書には次の事項を明記する。	
地盤概要	工事内容（掘削範囲・掘削深度・改良土量・設計基準強度）
工事期間及び工程	工事要領（使用固化材・配合）
施工機器および仮設設備と配置	配合管理の方法
施工管理の方法	品質検査の方法
各種作業の主たる従事者の組織表	施工記録の方法
安全対策	建築請負業者の本工事責任者
本工事施工業者及び責任者	

5. 配合管理

- （1）攪拌混合に使用する固化材は一般軟弱土用セメント系固化材とする。
- （2）セメント系固化材の配合及び使用量は下記を目安とする。（事前に現状土による室内配合試験を実施し、配合量を決定する）  
固化材料：ジオセツト200同等、ユースタピラー50同等  
添加量：100kg/m<sup>3</sup>

6. 施工

- （1）作業地盤は、施工機械が傾斜・転倒しないように養生する。
- （2）必要に応じ監督員立会いのもとで試験打ちを行う。地盤調査地点など地盤の状況が把握できる地点の近くで試験施工を行い  
所定の下部地盤に到達した時に次の事項を確認し管理指標値を決定する。  
深さ  
土質・湧水等
- （3）基本的な施工順序を以下に示す。施工の障害になる事項が判明した場合には別途協議する。  
掘削区画の割り振り  
セメント系固化材を混合攪拌する。  
改良天端の不陸調整を行う。
- 所定の掘削深度まで掘削する。  
改良厚50cm以下にて中間転圧を行う。  
本工事より排出された残土は場内仮置き又は、別途協議し対応を決定する。

7. 施工機械

- （1）固化材と改良対象土を確実に混合攪拌することのできる施工機械を用いる。
- （2）所定の施工管理項目を計測できる管理機器を用いる。
- （3）改良機本体は、本地業の施工仕様を満足できる施工機器を装備したもので、自走式とする。
- （4）転圧機械は、十分な転圧効果が得られる機械とする。

8. 施工管理

- （1）施工の安定性を確保するために下記に示す項目について施工管理する。  
形状・寸法  
掘削深度：計測器にて計測し記録する。  
ブロック割：改良範囲のブロック区割りを行う。

セメント系固化材：固化材を計量し使用量を記録する。

攪拌混合  
攪拌混合：固化材の色が目立たなくなるまで十分混合攪拌する。

下部地盤  
支持地盤の確認は地盤調査資料と掘削時の土質確認を目視にて行う。

改良天端処理  
所定の仕上がり高さにするために、施工後適切な時期にバックホウ等で削り取って天端処理を行う。

- （2）施工の立会い 建築工事の請負者は本地業責任者及び施工責任者を定め、両者は本地業の施行中は立ち会うものとする。

9. 品質検査

- （1）検査対象部、検査対象層及び調査箇所数  
検査対象部は1区画1単位とする。  
検査対象部は施工条件、施工規模、検査方法等を考慮し適切に設定する。  
調査箇所数（検査対象部に対して）

検査手法	モールド試料	1ヶ所×3本
------	--------	--------

（2）合否の判定

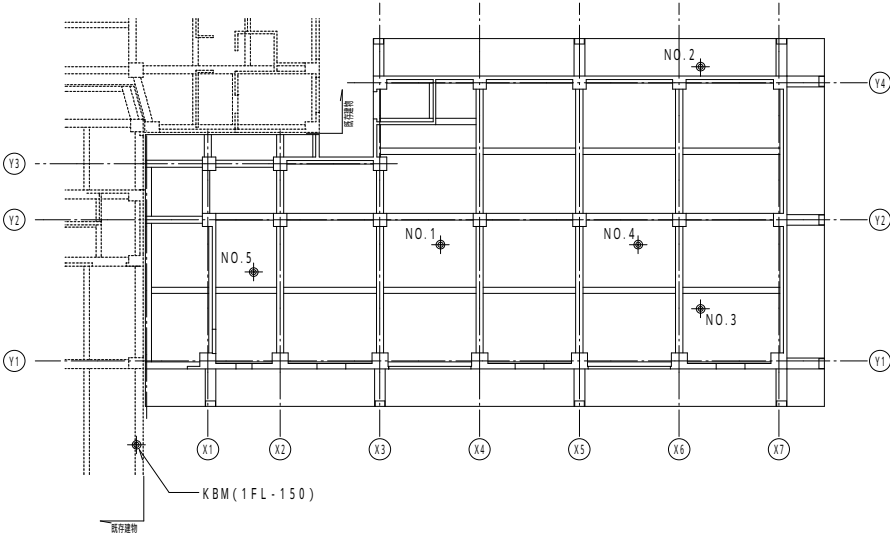
設計対象層について抜き取り1カ所に対して3個の供試体を採取し、その平均値をその個所の強度とする。  
一軸圧縮試験は第三者機関で行うものとする。

$X_i$   $F_c$   
 $X_i$ ：検査対象層より採取した個々のコアの一軸圧縮強さ（材齢7日）（ $i$ ：n）（KN/m<sup>2</sup>）  
 $F_c$ ：設計基準強度（KN/m<sup>2</sup>）  
n：コア抜き取り個数  
i：個々の供試体

10. 報告

工事完了後、次の項目について報告書をまとめ、監督員に提出する。  
改良範囲の伏図  
掘削の範囲  
攪拌混合・転圧状況  
試料の強度管理試験結果  
攪拌混合の施工日  
掘削深度  
セメント固化材の配合と使用量  
合格判定結果

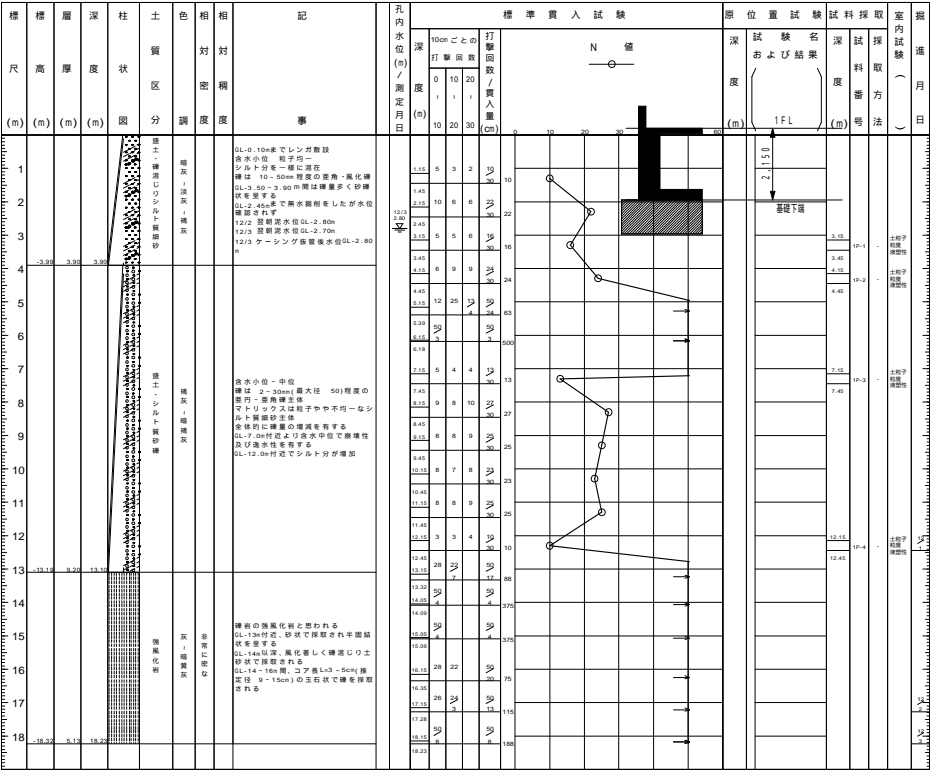
 株式会社 鈞谷建築事務所	1級建築士 第119816号 吉田 典生	有限会社 後藤構造設計事務所 1級建築士 第343527号 構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣	製作年月日 26.03	設計番号 25-42	図面番号 S-18	工事名称 西部地区小学校災害復旧工事	縮尺 N-SCALE
						図面名称 浅層混合地盤改良特記仕様書	



ボーリング柱状図

調査名 (仮称) 西部地区小学校災害復旧工事

ボーリング名	No. 1	調査位置	石川県輪島市門前町清水10の21番地	北緯	37°17'31.2"
発注機関	株式会社 釣谷建築事務所	調査期間	令和 7年 12月 1日 - 7年 12月 3日	東経	136°45'52.4"
調査業者名	株式会社 サムシング 富沢英典 電話 (0766-287-3761)	主任技師	浪谷 剛樹	現場代理人	満野 拓郎
孔口標高	BM -0.09m	角	180°	方	北 0°
総掘進長	18.23m	度	180°	向	北 0°



株式会社 釣谷建築事務所

1級建築士 第119816号 吉田 典生

有限会社 後藤構造設計事務所  
1級建築士 第343527号  
構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣

製作年月日  
26.03

設計番号  
25-42

図面番号  
S-19

工事名称  
図面名称

西部地区小学校災害復旧工事  
土質柱状図 1

縮尺

ボーリング柱状図

調 查 名 ( 仮 称 ) 西 部 地 区 小 学 校 災 害 復 旧 工 事

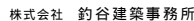
ボ-リング名	No. 2		調査位置	石川 兼輪島市門前町字清水10の21番地		北緯	37°17'31.5"	
発注機関	株式会社 岩谷建築事務所		調査期間	令和 7年 12月 22日 ~ 7年 12月 22日		東経	136°45'53.0"	
調査業者名	株式会社サンエー 調査所 電話 (090-2877-3701)		主任技師	渋谷朋樹	現場代理人	コナエ 吉岡昇一	東バジツ 豊住 定立悦樹	
孔口標高	BM 10.33m		地盤状況	試錐機	使用機	東邦 D0D	井ノ部 落下用具	
掘進速度	7.24m/分		地盤状況 地盤 記号	エンジン		TF-90M	ボンプ BG-4	

標尺	層高	深柱	土質	柱状	色相	相対密度	相対密実率	記号	事	標準貫入試験				原位重試験		試料採取		掘進案内試験 (月日)
										深 度 (m) /測定 日	10cmごとの 打撃回数 N	打回数を 貫入率 (%)	値	深 度 (m)	試験名 および結果	深 度 (m)	採取方 法	
(m)	(m)	(m)	(m)	図	調	度	度											
1	2.20	1.50	1.30	図	調	度	度		DL-0.1mまでアスファルト DL-0.2mまで砂利 ※水小位 粒子生用一 つ打てを一回に測定する 2-50mの角鋼棒や金属片を投入 する 12/22 作業後深水位 DL-1.40m 12/22 1-p-jp-作業後深水位 DL-1.40m	10/22 12/22	6 15.5	4 14	14	14	14	14	14	
2									深水位の強風化有 砂状・礫状が採取される 礫状は角礫主体である 部分的に平間礫状を認める DL-2m付近、砂状を多く確認し平間 礫状を認す DL-2.30mまで無水露出したが水露 出されず	11/22 12/22	16 15.5	26 16	16 16	63	63	63	63	
4											15.5	26	16	16	16	16	16	
5											15.5	26	16	16	16	16	16	
7	17.80	5.30	2.20	図	調	度	度				15.5	26	16	16	16	16	16	

ボーリング柱状図

調查名 (仮称) 西部地区小学校災害復旧工事

ボーリング名	No. 3		調査位置	石川東輪船会 市門町字清水10の21番地				北緯	37° 17' 31.5"			
発注機関	株式会社 約谷建設事務所				調査期間	令和 7年 12月 23日 ~ 7年 12月 24日				東経	136° 45' 53.0"	
調査業者名	株式会社 約谷建設 資本金 資本金 電話 (075-287-3701)			主任技師	渡谷朋樹	現場代理人	宇野拓郎	コピラ	吉岡昇一郎	ハンマー 費不取	ハンマー 落下用具	
孔口標高	BM -0.23m		方	地盤 地記	使用 機種	試験機	ハンマー 落下用具	ハンマー 落下用具				
総掘進長	13.24m		度	向	エンジン	TF-90M		ポンプ		BG-4		

[illegible]

1級建築士 第119816号 吉田 典生

有限会社 後藤構造設計事務所

1級建築士 第343527号  
構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣

製作年月日

設計番号

図面番号

上争名称

上争名称

上争名称

上争名称

西部地区小学校災害復旧工事

图面名称	
------	--

土質柱状図

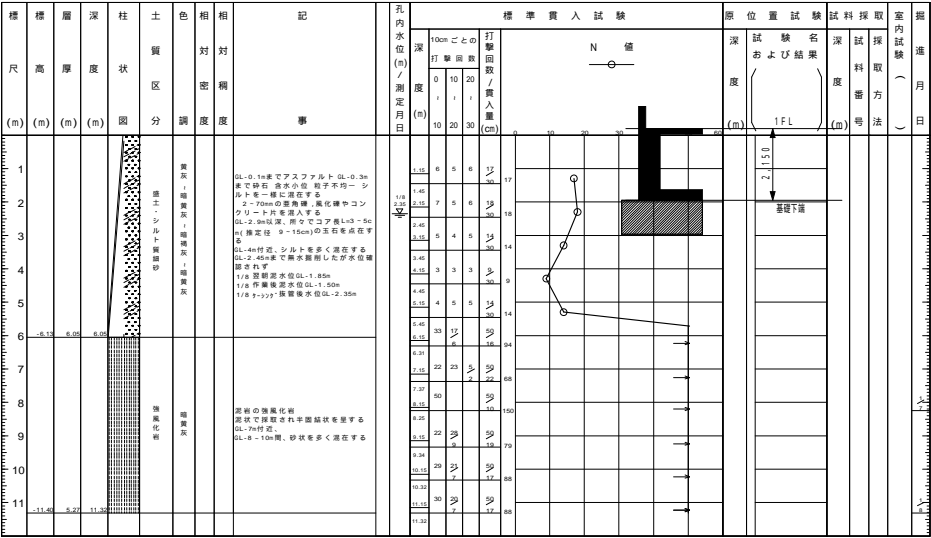
3

縮尺

ボーリング柱状図

調査名 (仮称) 西部地区小学校災害復旧工事

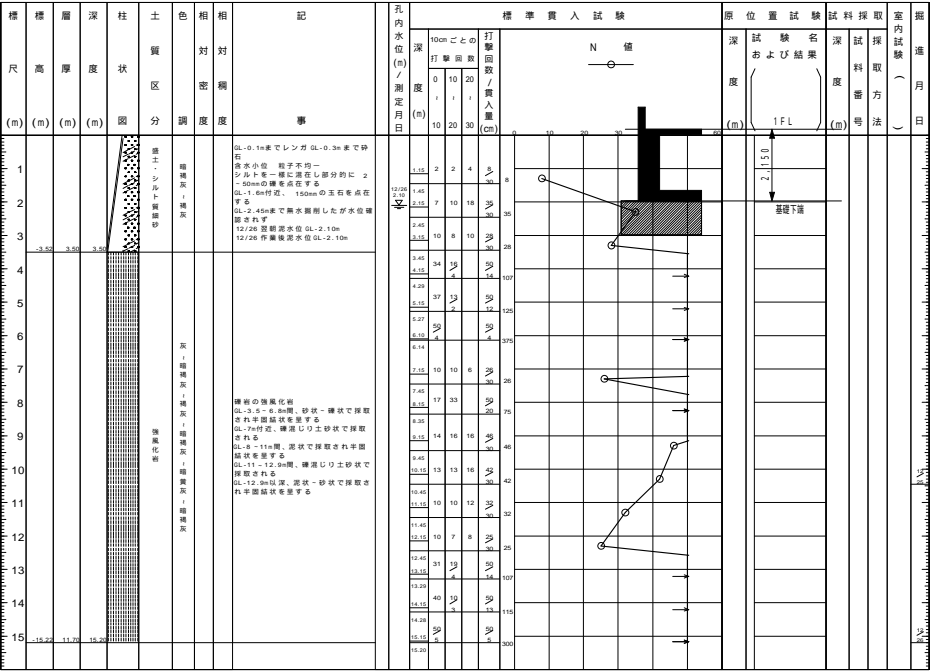
ボーリング名	No. 4		調査位置	石川県輪島市門前町字清水10の21番地		北緯	37°17'31.2"	
発注機関	株式会社 釣谷建築事務所		調査期間	令和8年1月7日 - 8年1月8日		東経	136°45'53.0"	
調査業者名	株式会社サムシング 富田支店 電話 (076-2287-3781)		主任技師	渋谷朋樹		代理人	浦野拓郎	
孔口標高	BM -0.08m		角	北 0° 西 270° 東 90° 下 180°		地盤勾配	水平 0°	
総掘進長	11.32m		度	度		向	100° 南	
試験機	東邦 D0D		ポンプ	ハンマー 落下用具		エンジン	TF-90M	
試料採取	度		番号	度		方法	半自動落下装置	



ボーリング柱状図

調査名 (仮称) 西部地区小学校災害復旧工事

ボーリング名	No. 5		調査位置	石川県輪島市門前町字清水10の21番地		北緯	37°17'31.2"	
発注機関	株式会社 釣谷建築事務所		調査期間	令和7年12月25日 - 7年12月26日		東経	136°45'52.1"	
調査業者名	株式会社サムシング 富田支店 電話 (076-2287-3781)		主任技師	渋谷朋樹		代理人	浦野拓郎	
孔口標高	BM -0.02m		角	北 0° 西 270° 東 90° 下 180°		地盤勾配	水平 0°	
総掘進長	15.20m		度	度		向	100° 南	
試験機	東邦 D0D		ポンプ	ハンマー 落下用具		エンジン	TF-90M	
試料採取	度		番号	度		方法	半自動落下装置	



株式会社 釣谷建築事務所

1級建築士 第119816号 吉田 典生

有限会社 後藤構造設計事務所

1級建築士 第343527号  
構造設計1級建築士 第10417号 後藤 真嗣

製作年月日

26.03

設計番号

25-42

図面番号

S-21

工事名称

西部地区小学校災害復旧工事

図面名称

土質柱状図

3

縮尺